

URP GCOE DOCUMENTのご案内

都市研究プラザは、2007年6月にグローバルCOEプログラム「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」に採択されて以降、世界的な研究者が集う国際ラウンドテーブル会議やワークショップ等、様々な国際的な研究・交流活動により都市研究のネットワークを築くとともに、都市の再生を模索するまちづくり活動・調査等を幅広く展開しています。そして、これらの成果は8つのジャンルの刊行物によって記録・公表されています。

このうち、都市研究プラザが編集を担い、Elsevier社が発行する国際ジャーナル*City, Culture and Society (CCS)*は、2010年刊行以来、7号が発行されています。

また、国内の公式刊行物であるURP GCOE DOCUMENTは、第1号から10号までが全国の書店やインターネットサイトを通じて販売されています。そして、間もなく第11～13号も発行される予定です。

URP GCOE DOCUMENTシリーズ A4判並製

発行：大阪市立大学 都市研究プラザ
 発売所：水曜社 (<http://www.bookdom.net/suiyosha/>)
 定価：第1～8号、10号2,835円(税込)、第9号3,360円(税込)

- 第1号 創造都市のためのアートマネジメント
Art Management for Creative City (2008年3月)
- 第2号 船場アートカフェ
2006年1月～2008年3月 (2008年3月)
- 第3号 世界創造都市フォーラム2007 (2008年3月)
- 第4号 都市再生と創造性 (2009年3月)
- 第5号 社会的接点としてのアートマネジメント
アジア・アートマネジメント会議2 (2009年3月)
- 第6号 記憶と地域をつなぐアートプロジェクト
こころのたねとして釜ヶ崎2008 (2009年3月)
- 第7号 Managing Sustainability and Creativity: Urban Management in Europe and Japan (2009年11月)
- 第8号 地域の声を結ぶアート アジア・アーツマネジメント会議3 (2011年3月)
- 第9号 International Symposium: Urban Regeneration through Cultural Creativity and Social Inclusion (2011年6月)
- 第10号 Chinese Cities and the Outside World: A Workshop for City, Culture and Society (2011年6月)
- 第11号 Creating Cities; Culture, Space and Sustainability: The 1st City, Culture and Society (CCS) Conference (2012年2月予定)
- 第12号 社会的包摂と舞台表現
第3回アート&アクセス シンポジウム・公演 (2012年3月予定)
- 第13号 船場アートカフェ2 2008年4月～2012年3月 (2012年3月予定)

最新の発行情報は、以下をご参照ください。
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/archives/documents.html>
 この他、ワーキングペーパー、レポート、ニューズレター等は都市研究プラザの以下のサイトで閲覧することができます。
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/archives/index.html>

イベント・研究会の予定		
各詳細は、都市研究プラザホームページをご覧ください。		
2/3	クリエイティブ・カフェ17「ランドリー氏と大阪を語る夕べ」 ・・・船場アートカフェ	第1ユニット
2/4	創造都市ネットワーク会議 ・・・文部科学省講堂	第1ユニット
2/10	マンスリーアートカフェ「Art in health care 医療とアート、その将来」 ・・・船場アートカフェ	第2ユニット
2/13 ～16	東アジアオルタナティブ地理学会議 ・・・クアラルンプール	第3ユニット
2/20	第10回ジョグジャカルタ・都市研究フォーラム ・・・ガジャマダ大学	第2ユニット
2/23 ～25	東アジアインクルーシブシティネット会議 ・・・ソウル市	第3ユニット
2/26	追手門学院文化産業講座 特別編東日本大震災復興支援企画 「伍芳コンサートと鶉鳥神楽公演」 ・・・追手門学院大阪城スクエア	第2ユニット
2/28	第1回ソウル大・大阪市立大ホームレス研究・実践ワークショップ ・・・西成プラザ	第3ユニット
3/1 ～2	第10回バンコク・都市文化研究フォーラム ・・・チュラロンコン大学	第2ユニット
3/27 ～28	URP特別研究員(若手)研究発表会(合評会) ・・・大阪市立大学	

■特別研究員(若手)公募
 URP特別研究員(若手)募集(平成24年8月募集分)2012年7月に公表を予定しています。
 情報⇒ <http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/about/recruit.html>

■URP-Newsletter 次号発行予定は、2012年5月です。

URP Osaka City University | Urban Research Plaza
 大阪市立大学 | 都市研究プラザ

「都市研究プラザ」は、2006年4月に誕生しました。日本最大の公立大学として、これまでも都市の研究に注力し、実績をあげてきた大阪市立大学が、都市再生へのチャレンジとして立ち上げた全く新しいタイプの研究施設です。「プラザ」という名前が示すように、「都市」をテーマとする人々が出会い、集まる広場をめざしています。大阪や周辺都市、さらに海外の都市に小さいサテライト施設(現場プラザ、海外サブセンター)を設け、教員・院生スタッフが現場や海外に出て研究やまちづくり活動を行っています。また、「プラザ」は、世界第一線の都市研究者・政策家と国際的なネットワークをつくり、国際シンポジウムやワークショップを開催しています。2007-11年度グローバルCOE拠点に採択され、「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」をテーマに多彩な研究プロジェクトを展開しています。

<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/>

558-8585 大阪市住吉区杉本3-3-138 tel: 06-6605-2071
 e-mail: office@ur-plaza.osaka-cu.ac.jp

所長 佐々木雅幸 副所長 水内俊雄 岡野 浩 富田常雄
 ユニット長 1U 佐々木雅幸 2U 嘉名光市 3U 水内俊雄 4U 岡野 浩
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/>

大阪市立大学 都市研究プラザ ニューズレター 第14号 2012年2月
 編集委員会 佐藤由美、西田貴子
<http://www.ur-plaza.osaka-cu.ac.jp/staff/>

本ニューズレターは文部科学省グローバルCOEプログラム「文化創造と社会的包摂に向けた都市の再構築」の支援を受けています。

keyword's column

自治
 【Self Governance】

地方自治研究においては、「自治」という言葉は、「団体自治」と「住民自治」の2つの観念を包含するものであると理解されている。「団体自治」とは、国とは別個の法人格を有する地方自治体が、地域の公共的課題にいかに対処すべきかを、自律的に判断することが保障されていることを意味し、「住民自治」とは、この地方自治体の自律的判断に、その地方自治体の区域で暮らす人々が、自らの意思を反映させる可能性が保障されていることを意味する。

「団体自治」も「住民自治」も、今日の先進諸国においては、保障されているか否かではなく、どの程度保障されているかが問われるべきものである。わが国においては、90年代半ばから国主導で進められた一連の分権改革によって、地方自治体に「団体自治」が保障されている程度は、かつてよりもだいぶ高まった。それに対して、「住民自治」の保障は、全国一律の最低限度の保障を超え、その程度をどこまで高めていこうか、各地方自治体の創意に委ねられている。そして、個性豊かな地域づくりが求められるこれからの時代においては、地域の実情に根ざした、より民主的な自治体運営を志向した改革がかつてよりも強く要請され、そうした課題に向き合う都市研究が今後、ますます重要となる。

阿部昌樹(都市研究プラザ運営委員/法学研究科教授)

In the study of local self-governance, it is understood that the word 'self-governance' includes the two different ideas of 'local autonomy' and 'local democracy.' 'Local autonomy' means that the local public entities, which are legal personalities separate from the state, are guaranteed the ability to make independent judgments as to how public issues should be dealt with in their respective local areas, and 'local democracy' means that people who live within the jurisdiction of a local public entity are guaranteed the ability to have their own will reflected in the judgments of the local public entity.

Among the advanced democracies today, what is at issue is not whether 'local autonomy' and 'local democracy' are both guaranteed, but to what degree they are guaranteed. In Japan, through a series of decentralization reforms initiated by the national government starting in the mid 1990s, the degree to which 'local autonomy' is guaranteed to the local public entities has become considerably greater than ever before. In contrast to that, to what extent guarantees of 'local democracy' should be enhanced beyond a nationwide minimal level of guarantee has been left up to the creative will of each local public entity. And, in the period from now on, which calls for development of areas rich in their own individuality, reforms, rooted in local conditions, that promote more democratic operation of each local public entities are required more strongly than ever before, and urban research which faces those issues will become ever more important in the future.

Masaki ABE (URP Steering Committee/ Professor, Graduate School of Law)

特集 国際ラウンドテーブル会議「都市の世紀を拓く」(第2回)

SPECIAL The 2nd International Roundtable Meeting: "Towards the Century of Cities"

2011年12月1日(木)~2日(金)、都市研究プラザは、昨年に引き続き、第2回目となる国際ラウンドテーブル会議「都市の世紀を拓く」を大阪国際交流センター(共催)において開催した。

今回は、「災害後社会とアーツによる地域マネジメント」と題し、東日本大震災を含め「災害」から地域社会が再生するためのアートの役割について討論を行った。

初日は、国内外の事例報告、市民ワークショップが行われた後、実務家と研究者が集う専門家会議が開かれた。夕方からはエキシビションとして陸中沿岸を代表する神楽「鶴鳥神楽」の公演が行われた。

また、2日目は、都市研究プラザの若手研究員による研究報告、橋本裕之教授(盛岡大学)による基調講演、そしてシンポジウム『「災害後社会とアーツによる地域マネジメント」の発信へ向けて』が開催された。

Program

Thursday, December 1st

Session 1 Case studies in Thailand, Indonesia and Japan

Chair: *Chisako Takashima* (Kyoto University of Foreign Studies)

1. *Hideaki Sasajima* (Osaka City University)
Arts in support activities: the case study of Great East Japan Earthquake
2. *Hiroyuki Nobuto* (Osaka City University)
Community regeneration through arts: the case study of aftermath of Tsunami disaster in Phuket
3. *Kamol Phaovasadi* (Chulalongkorn University, Thailand)
Arts and community regeneration
4. *Djohan Salim* (Indonesia Institute of the Arts, Indonesia)
Disaster and arts education

Session 2 Workshop, Arts for psychological care and community regeneration: a case study of Osaka

Coordinator: *Shin Nakagawa* (Osaka City University)

1. *Masako Fujii* (Director of Color Paradise)
Paintings energized children: message from Kobe
2. *Takao Hino* (Director-general in Nagata Cultural Council/ Lecturer, Kobe Tokiwa University)
Disaster and culture: the case study of community development utilizing music in Nagata ward
3. *Edward Sumoto* (Engineer and Technology Official, British Consulate General in Osaka/ Representative of Mix Roots Japan)
Arts linking disasters and everyday life: people's awareness of disaster prevention created by expressive activities and share of skills
4. *Mitsuhiro Akita* (Chief priest in Jodo shu Dairenji/ Principal of Padoma kindergarten)
Mental healthcare in the Great East Japan Earthquake

Commentators: *Djohan Salim, Kamol Phaovasadi, Sang-oh Lim*

Session 3 Intensive Dialogue between academia and society

Chair: *Etsuko Yamaguchi* (Osaka City University)

1. *Osamu Kinugasa* (City of Design Promotion Office, Planning and Coordination Bureau in City of Kobe)
Kobe, City of Design
2. *Keisuke Ikegaya* (NPO Kurashizukuri Network Kitashiba)
Kurashizukuri (create a life) and empower
3. *Takeshi Haraguchi* (Osaka City University)
Memories of outcasts
4. *Chikahiro Hanamura* (Osaka Prefecture University)
Hazard and imagination
5. *Hiroshi Fuji* (Artist)
This is no good! Something is wrong!

■基調講演「愛と喝采の神楽—岩手県沿岸部の民俗芸能と地域社会」 セッション6

12月2日(金)に行われた橋本裕之氏(盛岡大学教授)による基調講演は、鶴鳥神楽を事例とし、地域社会における民俗芸能の意味と役割を提示するものであった。

鶴鳥神楽は、黒森神楽とともに、「廻り神楽」という全国的にも珍しい上演形態をもつ民俗芸能として知られる。鶴鳥神楽は、海の守護神として三陸沿岸部の漁業従事者に長い間厚く信仰されてきた鶴鳥神社の権現様を神体として奉持し、毎年1月から約2ヶ月間かけて各地域の宿を巡行している。

橋本氏によると、神楽とは、共同体や個人の生命力を強化するために、祭りで祓いや清め、鎮めなどを実践する芸能である。全国各地の神楽には、神事が重要な要素を占めるものから娯楽的な要素が強いものまでさまざまある。鶴鳥神楽は、その両方の性質を併せ持ち、鶴鳥信仰に裏打ちされつつも、神事を司る宗教者ではなく神楽衆の圧倒的なパフォーマンスによって体現されていることに大きな特徴があると橋本氏は指摘した。

神楽衆は神の祝福(愛)を地域の人々に授け、人々は喝采をもってそれを迎える、こういった生活と信仰、芸能が濃密に結びつき、相互に支えあう地域コミュニティのありかたを、映像を交えながら解説した橋本氏は、地域コミュニティ



基調講演の会場風景

Session 4 Performance of "Unotori-Kagura (Folkloric Performing Arts in Iwate Prefecture)"

Commentary: *Hiroyuki Hashimoto* (Morioka University)
Coordinator: *Shin Nakagawa*

Friday, December 2nd

Session 5 Presentation by young researchers

Chair: *Kenkichi Nagao* (Osaka City University)
*Program of the session is listed in page9

Session 6 Keynote Speech. Kagura, love and acclaim: Folkloric performing arts and local society in Rikuchu regions

Hiroyuki Hashimoto Coordinator: *Shin Nakagawa*

Session 7 Final Symposium: Post-Disaster Communities and Arts Management

Chairs: *Masaki Abe* (Osaka City University)

1. *Kamol Phaovasadi* (Chulalongkorn University)
2. *Sang-Oh Lim* (Sangji University)
3. *Hiroyuki Hashimoto* (Morioka University)
4. *Masayuki Sasaki* (Osaka City University)

に大きな役割を果たしてきた民俗芸能が震災後の社会においてその役割を担い続けることの意味とその意義について、さらには、震災後の地域の人々の願いとしての「地域振興」「観光振興」に対して鶴鳥神楽が果たする役割について触れ、講演を終えた。

■エキシビション神楽公演「鶴鳥神楽」 セッション4

基調講演に先立ち、12月1日(木)には鶴鳥神楽の公演が行われた。被災地岩手県普代村からの参加、また関西初公演ということもあり300人もの観客が会場につめかけた。橋本氏による演目解説の後、「清祇(きよはらい)」、「山の神(やまのかみ)」、「恵比寿舞(えびすまい)」の三演目が神楽衆9名によって披露された。特に最後に上演された「恵比寿舞」では、舞手の軽妙な観客とのやりとりで会場はおおいに沸き、地域で長い間受け継がれてきた芸能の技に魅了された。

■林 朋子(都市研究プラザ特任助教)



熱気あふれる鶴鳥神楽の上演



観客と一体となった「恵比寿舞」

On December 1, 2011 (Thur.) we welcomed nine *Kagura* performers from Fudai-mura in Iwate Prefecture and a performance of "Unotori-kagura" was held. After an explanation by Prof. Hiroyuki Hashimoto, the three pieces "Kiyoharai," "Yama-no-kami," and "Ebisu-mai" were presented. An audience of as many as 300 filled the hall and were enthralled by performances of such high quality.

On December 2 (Fri.), Prof. Hiroyuki Hashimoto delivered a keynote speech. Using the "Unotori-kagura" as an example, he explained about the characteristics of the art and the local background. Additionally, he pointed out nature of the local community which has come about through mutual support, in which the livelihood and beliefs of the local people and their folklore and artistic forms are richly tied together, and also discussed issues involved in the reconstruction of the local community after the earthquake disaster.

■国内外の事例報告 セッション1

第一報告者の笹島秀晃(G-COE特別研究員)は、都市研究プラザ・東日本連携室での支援活動について報告し、支援の拡充にはNPOなどのネットワーク形成が有効であることを述べた。また被災者への心的支援では、アートを通じて被災者に働きかけることができる一方で、被災者の心的状況に適した活動の難しさを課題に挙げた。

次に、信藤博之(都市研究プラザ特別研究員(若手))は、プーケットにおける津波被害後のMoken族と若手アーティストの活動を事例に、津波で衰退した地域の自発的発展、過剰開発により生じた格差、特に教育においてアートが貢献できる可能性等を主張した。さらに、住民にとって日常的かつ直接的なアート活動の展開が、自らの街を見つめ将来を考えるきっかけとなっていることを示した。

続いて、カモン・パオサワット氏(チュラロンコン大学准教授)はバンコクの低所得者層コミュニティでのドキュメンタリー制作等の活動から、低所得者層との活動には、子供への介入、子供が集える場所の提供、子供と家族の関係への注意等が必要であることを論じた。また、地域情報の取得がニーズ把握と適切な活動の提供には不可欠であることを強調した。

最後に、ジョハン・サリム氏(インドネシア芸術大学教授)は、ジョグジャカルタでのエイドプログラムにおける音楽活動が、子供の社会性を醸成し、強固な社会と個人関係を形成していることを示した。学校のようにカリキュラムなどの制約がある場所での活動には、これらを解消するためのマネジメント力が課題となっている事を指摘した。

これらの活動事例から、コミュニティによって異なる多様なニーズの把握の困難さが共通の課題であることが明らかとなった。

■高島知佐子(都市研究プラザ特別研究員/京都外国語大学専任講師)

On December 1 (Thur.) in Session 1, "Case studies in Thailand, Indonesia and Japan" were presented by four researchers. In research on social inclusion through the arts, which is still in the budding stage, first of all it is important to know the field study area. This became an opportunity to understand through action case studies what features all such activities have in common and the issues in which they differ. The reports in common indicated the difficulties of grasping the local needs.

特集 国際ラウンドテーブル会議「都市の世紀を拓く」(第2回)

SPECIAL The 2nd International Roundtable Meeting: "Towards the Century of Cities"

■シンポジウム『災害後社会とアーツによる地域マネジメント』の発信へ向けて セッション7

本シンポジウムではまず、カモン・パオサワット氏より、バンコクでの洪水の経験を踏まえて、タイの経済成長政策によって、バンコクが、自然環境に適合的な都市から環境負荷の高い都市へと変貌していったことへの批判的考察が示され、生態系に適合的な都市へと再転換していくことの必要性が強調されるとともに、洪水によって寸断されたコミュニティの再生のためにアーツが果たす役割の重要性が示唆された。次いで、林相五氏(尚志大学校経済学部教授)が、文化経済学の観点から、ジョン・ラスキンの理論等を踏まえて、災害後社会においては、経済的危機とともに文化的危機もまた深刻化することを指摘したうえで、震災からの復興に際しては、経済的価値と文化的価値とのバランスを保った復興が目指されなければならないことを強調した。

三番目に、橋本裕之氏(盛岡大学教授)が、東日本大震災の経験に基づいて、震災からの復興には、震災による被害を受けたアーツそのものをいかに復興していくのかという視点と、アーツによって被災地域をいかに復興していくのかという視点との、双方が重要となること、そして、とりわけ後者の視点との関係では、地域の自然と文化に根ざしたアーツは、人々がその地域に住み続けることの理由となりうること、震災によって消滅しつつある地域を存続させるための最後の拠り所となり得ることを指摘した。

以上三者の報告を踏まえて、最後に、佐々木雅幸(都市研究プラザ所長)が、創造都市論の観点から、従来、創造都市論においては、コンテンツ・アートの現状改革的な力を重視する傾向が強かったが、伝統文化のコミュニティを再生する力にも着目する必要があること、震災からの復興に際しては、コミュニティの再生とアーツの再生とが不即不離の関係にあることが忘れられてはならないこと、都市が抱える問題と農村が抱える問題とは表裏一体の関係にあり、その解決のためには、創造都市の構想とともに創造農村の構想を一層彫琢し、その実現を図っていく必要があること等を指摘した。

これらの報告を踏まえ、パネリスト相互間で、また、フロアからのコメントも交えて、活発な議論がなされた。議論の中では、震災は、これまで看過してきたものの重要性を発見するきっかけとなり得ることや、アーツとりわけ伝



司会の阿部教授(左)と佐々木所長(右)

統芸能は、それぞれの地域の生活の一部として、ある種の必然性をもって、地域に根付いているのであり、アーツがそこにあることの必然性を再発見していくことが、震災からの復興に際しての重要な課題となること等が指摘された。



セッション7のパネリストたち

■阿部昌樹(都市研究プラザ運営委員/法学研究科教授)

In Session 7 on December 2 (Fri.) in the symposium titled "Post-Disaster Communities and Arts Management," four panelists reported on the tense relationship between increasing economic value and increasing cultural value, on the effect of the earthquake on the arts, on the mutual relationship between the restoration of communities damaged by the earthquake and the reviving of the arts rooted in those communities, and on the necessity of recognizing the arts as an indispensable element of those communities.

After the reports, there were comments from among the panelists and from the floor about the mutual relationships between the community, the arts, and reconstruction after the earthquake, and there was a lively discussion.

■市民ワークショップ「大阪発アーツによる心のケアとコミュニティの再生」セッション2

市民ワークショップ「大阪発アーツによる心のケアとコミュニティの再生」は4名のパネリスト、3名のアジアからのコメンテーターという構成で開催された。



コーディネーター中川教授

都市研究プラザは大学知と市民知の邂逅と協働を謳っているが、まさに本ワークショップはそれを実現したものである。

藤井昌子氏(色彩楽園主宰)による「子どもたちは絵を描いて元気になった〜神戸からの発信〜」は、阪神・淡路大震災のときに行った子どもへの絵画ケアについて語った。絵は内面を見つめるための有効なツールであり、心の痛みを抱えた子どもが絵を描くことによって徐々に回復し、自ら再生する力を獲得していった過程を報告した。

日野孝雄氏(長田文化協議会事務局長、神戸常盤大学講師)の「災害と文化—阪神・淡路大震災で壊滅的打撃を受けた長田区での活動と音楽による街づくり」では、1995年の大震災時には大きな力を発揮した「音楽による街づくり」の報告がなされた。アジアを中心とする外国人が多いという区の特長にも寄り添ったものとして紹介された。

須本エドワード氏(在大阪英国総領事館科学技術部科学技術官、ミックスルーツ・ジャパン代表)は「災害と日常を繋げるアート〜表現活動や技術共有による防災意識の構築」において、スリランカにおけるスラム問題解決のための演劇導入について紹介した。伝統芸能の形式を借りることによって生々しいテーマからの回避という知恵がそこにあるという。

秋田光彦氏(浄土宗大蓮寺住職・パドマ幼稚園園長)の「東日本大震災支援における心のケアについて」では、同治(同悲同苦)の考え方に従い、「してもらおうケア」ではなく「自ら気づくケア」が提案され、現代において宗教とアートを近づけていくことの意義も語られた。

ジョハン・サリム氏、カモン・パオサワット氏、林相五氏らのコメンテーターからは、創造性、祈り、スピリチュアリティ、セラピーといった観点から、独自の見解と質問が提示され、本ワークショップのテーマについての理解がますます深まった。

■中川真(都市研究プラザ兼任研究員/文学研究科教授)



パネリストたちによる熱心な議論

In Session 2 on December 1 (Thur.), titled "Workshop, Arts for psychological care and community regeneration: a case study of Osaka," coordinated by Prof. Shin Nakagawa, Ms. Akiko Fujii, Mr. Takeo Hino, Mr. Edward Sumoto, and Mr. Mitsuhiro Akita gave reports on practical activities in the disaster area and communities with threatened livelihoods, and Prof. Djohan Salim, Assoc. Prof. Kamol Phaosavasdi, and Prof. Sang-oh Lim participated as commentators. The power of the arts was reaffirmed.

■専門家会議「アカデミアと社会との対話」セッション3

12月1日(木)セッション3では、現場での実践や大学での研究に取り組む5名の専門家とともに、震災など社会や人生の「災い」とアートについて議論した。

「デザイン都市神戸」を提唱する衣笠収氏(神戸市企画調整局)は、「デザインとは主体的で人らしい幸せを感じさせる行為。共感を呼び、伝染するもの。」であると述べ、「あの日、あのときの震災の風景」から生まれたモノづくりを示し、人々の暮らしにある知恵や生き様がデザインへと昇華していくプロセスを紹介した。

コミュニティセンターを拠点に住民を巻き込む活動して

いる池谷啓介氏(都市研究プラザ特別研究員/NPO法人暮らしづくりネットワーク北芝)からは、特定の場所における「場づくり」の重要性と、その「場」で生まれる日常の中の非日常性が語られた。さらに東日本大震災被災地の情報センターへのサポート活動についても紹介があった。

西成で研究を続けている原口剛(都市研究プラザ研究補助スタッフ)は、地図にない隠蔽された地名「釜ヶ崎」の記憶について語り、原発の作業を送り出し続ける「釜ヶ崎」、「終わらない被災地」としての「カマガサキ」を語り継ぐアートの可能性を示した。

各地で風景を巡るアート実践を行う花村周寛氏(都市研究プラザ特別研究員/大阪府立大学准教授)は病院のアートプロジェクトを紹介し、「恐怖と闘う。恐怖に備える。恐怖から立ち直る。」ためのアートの可能性を述べた。また、「アートは(価値を)解体する、デザインは(価値を)構築する」というアートとデザインの区別も示した。

NPO法人プラス・アーツの藤浩志氏からは、「自分の違和感に向き合うこと」としてのアート、「何か違うなと思ってはいるけれど、何が違うかわからない」ことを言語化あるいは形にしていくアートの側面が述べられた。

最後に総合討論で、アートが非日常へ思いを馳せ、日常への想像力を高める存在であること、人々の関係性を育む水のような存在であるといった意見が交換された。さらに、社会や人生の「災い」に対して、失敗を恐れず、仲間と一緒に面倒なチャレンジを厭わない、そのような変革と創造のインキュベーターとしてアート活動が行われる「場」やコミュニティ作りの重要性が議論された。

■山口悦子(都市研究プラザ特別研究員/医学研究科病院講師)



フロアとの意見交換も行われた総合討論

In Session 3 on December 1 (Thur.), titled "Intensive Dialogue between academia and society," "disasters," such as earthquakes, in society and human life, and the arts were discussed, together with five specialists who are involved in practical work in the field and research at the university.

In the general debate, opinions were exchanged that art propels thoughts toward the extraordinary, that it is something which heightens the imagination towards the everyday, and that it acts like water in the cultivation of human relationship.

10

豊崎プラザのグッドデザイン賞特別賞受賞とオープンナガヤ2011

Good Design Sustainable Design Award & Open Nagaya 2011 in Toyosaki Plaza

豊崎プラザは大阪の住文化を伝える木造の長屋群と主屋から構成されている。90年前に建てられた建物は老朽化や住人の高齢化、空き家の増加などの様々な問題を抱えていた。しかし、大阪市立大学との出逢いをきっかけに、長屋の魅力や歴史的価値を見直し、住まいやまちを再生させる改修へと踏み出した。ほんまもん（本物）の現場を舞台に所有者・大学・学生・地域住人が共に協力しながら継続して改修を行っている。改修のテーマは「長屋本来の魅力の再生」「住まいとしての改修」「耐震補強」の3つである。

この豊崎プラザで取り組んでいる研究プロジェクト（豊崎長屋の改修）が2011年度グッドデザイン賞とその特別賞であるサステナブルデザイン賞（経済産業大臣賞）を受賞した。グッドデザイン賞は1957年に通商産業省によって設立されたもので、日本のデザインを総合的に評価してきている。受賞によって、豊崎プラザにもGマークを表記できるようになった。3,162件の審査対象の中から、金賞1点、大賞12点が選ばれ、それにつづく特別賞がサステナブルデザイン賞である。

2011年度グッドデザイン賞は2011年3月の東日本大震災をきっかけに生活の価値観を改めて見直すことからはじまっている。審査委員長の深澤直人氏（プロダクトデザイナー）は「適正」という次のようなメッセージを発表した。

デザインは、常に「適正」を問い続けることだと思います。デザインは、常に「適正」という美の軸を中心に揺れています。そして今は「適正」だと思いついていた軸の位置を、大きくシフトしなければならない時期かもしれません。

そういった意味でも、今年のグッドデザイン賞は今までとは少し異なった選定の基準になるでしょう。今までよりも、さらにサステナブル（持続可能）なものが必須になるでしょうし、明らかな無駄は排除し、ゴミにならず、未来に対して繋がっていくものでなければなりません。（「2011年度グッドデザイン賞審査委員長メッセージ（2011年5月公開）」一部抜粋）

豊崎プラザでの取り組みは、東日本大震災に直接関係するわけではないが、阪神・淡路大震災以降、住むことや地震について改めて考えたことが発端となっている。今回のサステナブルデザイン賞の受賞は、都市のなかの住む場所にこだわって再生に取り組んできた、その視点が評価されたものといえる。グッドデザイン賞ユニット審査委員長である難波和彦氏（建築家）は、豊崎プラザが新築主義から脱している点を評価し、リノベーションのプロトタイプとなる可能性に言及した。持続可能な都市づくりにつながっていく、その先進性が認められたといえる。

この受賞を記念し、2011年11月19日（土）、オープンナガヤ2011（第5回長屋路地アートと大阪長屋見学バスツアー）

を行った。2007年に始まった長屋路地アートは今回で5回目となり、グッドデザイン賞受賞報告と2010年度に改修した北終（きたはて）長屋と命名した3軒の長屋改修のお披露目を中心プログラムであった。大雨が降る中、学内外あわせて約160名の参加があった。記念シンポジウムでは、竹原義二（都市研究プラザ特別研究員/生活科学研究科教授）と設計に関わった生活科学研究科の院生が改修プロジェクトを紹介した。



豊崎プラザの路地



Gマークのある受賞記念の盾

長屋路地アートに先立ち、長屋を実際に見て理解を深めるため、大阪長屋見学バスツアーを新たに実施し、30名以上の参加者があった。大阪市阿倍野区にある洋室付き長屋（阿倍野プラザ）と寺西長屋、そしてこの豊崎長屋をバスで巡った。その後、今回のイベント参加者の一人、長屋再生への意欲を持っているという市内の長屋所有者から相談を受けた。今回のグッドデザイン賞受賞を励みとして、長屋再生の情報発信を継続し、豊崎プラザの取り組みの輪を都市全体に広げていきたいと考えている。

■小池志保子(都市研究プラザ特別研究員/生活科学研究科准教授)

The Toyosaki Plaza is a research base that utilizes Nagaya to express the residential culture of Osaka. The project being undertaken at the Toyosaki Plaza, the “Nagaya Renovation Project,” received the Good Design Sustainable Design Award 2011.

The groundbreaking nature of the Nagaya Renovation Project in being connected to the building of sustainable cities was recognized.

On November 19, 2011 (Sat.) we held “Open Nagaya 2011,” the Fifth Nagaya Roji Arts Festival and Osaka Nagaya inspection bus tour and disseminated information. The issue from now on is to widen the Toyosaki Plaza’s circle of involvement to the entire city.

豊崎プラザ

大阪らしい長屋と路地の再生実験

梅田に近い都心にあり、大正年間に建設された主屋と長屋建の貸家群、路地が残る一郭です。オーナーと大学が共同して、老朽化した木造住宅の耐震設計、快適な住生活、住宅経営、居住環境の整備を柱に、都市住宅としての長屋の再生モデルを目指し、居住文化の継承や市民の生涯学習なども含めて、創造的なまちづくりを進めています。

長屋路地アートでの学生によるまちづくり提案

2011年11月19日（土）に豊崎プラザにて開催された第5回長屋路地アートでは、新たに改修を行った北終（きたはて）長屋のひとつ長屋ラボ2階を利用して、学生によるまちづくり提案の展示を行った。これは、生活科学部居住環境学科3回生の授業まちづくり演習において、



まちづくり提案の展示風景

豊崎周辺のまちづくりについて検討した成果の発表であり、地域の方々にも声をかけ、見学に来ていただいた。

グループごとに発表された提案は、学生がまち歩きを重ね、時には地域の方に話を聞く等、いずれもまちの特徴や課題をふまえたものであり、今回の展示はそれらをもとに学生の立場から地域に提案するという、貴重な機会となった。また、学生自身が展示準備や当日の見学者への対応等を行うことで、見学者の反応を直接感じることができた。

学生は、「まちの発展のきっかけづくり」としての提案展示に意義を感じており、長屋空間を活用した学生と地域の新たな交流の場となった。 ■荻千紘(豊崎プラザ研究補助スタッフ)

和泉プラザ

「地域の歴史的総合調査」の取り組み

大阪市立大学日本史研究室と和泉市教育委員会が、毎年夏に実施する和泉市合同調査を、主要な活動として位置づけています。毎年、和泉市内の1つの町会を対象に、地域の歴史を多様な方法から総合的に調査し、地元住民とともに地域の生活構築の歴史を学んでいます。

和泉市東阪本町・赤松家文書の追加史料発見！

2001年度和泉市合同調査の対象地である東阪本町は、1677（延宝5）年に成立した坂本新田から引き続き集落である。合同調査では、坂本新田の開発請負人の一人で、幕末まで代々庄屋を務めた赤松家に伝わる古文書が調査された。近世史料など、総点数は2245点。その後の研究成果は、『市大日本史』5号（2002年5月）や『和泉市の歴史3 池田谷の歴史と開発』（2011年9月）に結実している。しかし、これだけでは終わらなかった。2011年10月、新たに赤松家の母屋裏の納屋から未調査の史料群が発見されたのである。



破損が甚だしい木箱底部にあった史料

現在調査途中の段階だが、追加史料の総点数は1000点を下らないものと思われる。内容には、毎年の免定（年貢納入命令書）や宗門改帳、庄屋の御用留帳など、近世の坂本新田を考えるうえでの基礎史料が多く含まれており、さらに研究を深化させることができると予想される。しかし一方で、湿気と虫喰いによって激しく破損してしまっている史料も少なくない。地域の貴重な歴史的財産を後世に伝えていくため、調査・研究を通じて史料群の意味を所蔵者と共有し、適切な保管環境をアドバイスしていくことの重要性をあらためて自覚させられた。 ■久角健二(和泉プラザ研究補助スタッフ)

クリエイティブセンター阿波座

クリエイティブな都市型産業の連携推進と政策研究の拠点

デザイン関連産業を中心とする事業者集積地域の中心に位置する本プラザは、クリエイターのオフィススペースが同居する改装されたビルの一角にあります。ここでは、「扇町プラザ」の機能を引継ぎ、大阪市全体の創造産業を対象に、その発展に向けた政策研究と連携活動の推進をめざします。

クリエイティブ・サロン — 農業生産者と都心・就業者の創造の場



青空の下でクリエイティブ・サロン「歌とピクニック」

創造の場の社会実験として開催しているクリエイティブ・サロンの中で、継続して対話を深めているテーマの一つが「食」である。産地の関係者がクリエイティブ・サロンへ参加されたことをきっかけに、生産者と都心・就業者の創造的なつながりについて考えていこうという動きが生まれ、交流がはじまった。

まず、2011年9月、「あわぎスタイル,0」での丹波の生産者によるマルシェが行われ、そして10月のクリエイティブ・サロンは丹波市で開催された野外イベント「歌とピクニック」の中で開催された。その後、11月のクリエイティブ・サロンでは、生産者・消費者・物流企業で構成される「愛農NOAH(ノア)」のメンバーから、有機農業の里/岸和田・塔原(とのはら)についての報告がなされた。会社員、大学生、生産者、デザイナー、コーディネーター等、多様な分野、キャリア、年代の13名が参加。その後、協働が生まれた。12月には、塔原の有機野菜を使ったオリジナルメニューを、器とコーディネートして提供するパーティが開催され、さらなる協働やネットワークの広がりが見られた。

次回は塔原でクリエイティブ・サロンを開催する計画が進んでいる。今後、農業生産者と都心・就業者のコラボレーションから、創造的な営利・非営利活動が生まれてくることが期待される。 ■上野信子(G-COE特別研究員)

2U

第6回アジアアーツマネジメント国際会議

The 6th International Conference of Asian Arts Management

2011年12月13日(火)、インドネシア芸術大学(ISI)ジョグジャカルタ校にて都市研究プラザ主催で第6回アジアアーツマネジメント国際会議を開催した(共催: ISI、ガジャマダ大学)。この会議は2006年以降毎年大阪で開催され、アジア12か国から専門家を招聘してアジア型アーツマネジメントの構築について議論してきたが、今回は2011年1月のバンコク会議に続く2度目の海外開催となった。

会議はジョン・サリム氏 (ISI教授) と中川眞 (都市研究プラザ兼任研究員/文学研究科教授) のスピーチで始まり、日本人5名とインドネシア人4名が各自の拠点での活動や自ら手掛けるプロジェクトに関して発表した。上田假奈代氏 (都市研究プラザ研究補助スタッフ/NPOココルーム) は釜ヶ崎での、中西美穂氏は「ハウス・オブ・コンフォート」プロジェクトの、森真理子氏は「まいづるRB」プロジェクトの、岡部太郎氏はたんぼぼの家の、オン・ハリ・ワハコ氏はニティプラヤン村の、ティミー・ハルタディ氏は「子供王国、本をもらおう」プロジェクトの、エコ・ヌルヨノ氏はゴミ捨て場におけるアートイベントの実践報告をした。また、林朋子 (都市研究プラザ特任助教) は「日本における公立アートセンターの可能性」、ハリム氏は「コミュニティのマネジメント、公共空間と文化政治」について報告した。

全体として、日本とインドネシアにおける公共空間の概念の相違や、指導アーティストが去った後のコミュニティ活動の継続のあり方が議論的となり、指導者が去った後のコミュニティ活動継続を支援するのは行政の役割だという林の意見はインドネシア側に新しい視点を提供した。

総括討論では、中川眞が原田麻衣氏(NPOココルーム、本会議参加者)の福島県における活動を紹介しつつ、被災地でのコミュニティ回復におけるアートの可能性について問題意識の共有を呼び掛けた。日本、インドネシアともに活動内容自体よりもその社会的背景や活動を始めた動機についての質問が多く、アートと個人を取り巻く状況の違いにつ



会議の様子

いて、両国で共有すべき事が多く残されていることがあらためて浮き彫りになった。

なお、前日の12日(月)はジョグジャカルタ市内外において、エクスカッションを実施し、キュレーターの解説付きでジョグジャ・ビエンナーレの見学やオン氏の手掛けるニティプラヤン村の活動、アナック・ワヤン・インドネシア(団体)が手掛けるチョデ川流域の子供のための活動、住民が運営するミノマルタニ村文化局の音楽やコミュニティラジオの活動等の見学を行った。

■富岡三智(都市研究プラザ特別研究員(若手))

On December 13, 2011 (Tue.) at the Indonesian Institute of the Arts, Yogyakarta (ISI), the 6th Annual Asian Arts Management International Conference was held, organized by the Urban Research Plaza (joint organizers: ISI and Gadjah Mada University). Five Japanese and four Indonesians gave presentations on activities in the respective communities where they are based and on the activities of projects they themselves are working on. Concerning the differences in the circumstances surrounding the arts and individuals, the fact that there are many things remaining that should be shared in both countries was once again set in high relief.

船場アートカフェ

芸術によるコミュニティ再構築

芸術がもつ「接合/媒介する力」に焦点をあて、都市における芸術の可能性を追求しています。大阪固有の文化資産に着目しつつ、芸術を介して人と人をつなぐ新しいコミュニケーションの場を創造する試みを展開します。

まちのコモンズ(船場博覧会2011)

4年目を迎える「まちのコモンズ」は11月21日(月)~25日(金)に開催された。今年から神農祭(11月22~23日)と時期を合わせ、より多くの多様なまちの来訪者に楽しんでもらえるようになった。



恒例の吉兆お餅つきの様子

実施体制も大きく変化した。船場アートカフェ、地元町会等による「まちのコモンズ実行委員会」に加え、船場のまちづくり団体「船場地区H O P Eゾーン協議会」「堺筋アメニティ・ソサエティ」と「船場博覧会2011」を合同開催することとなり、「まちのコモンズ」はプログラムのひとつとして位置づけられることとなった。大学発の社会実験が、いよいよまちのお祭りへと融合する段階に入ってきたといえるだろう。恒例の吉兆お餅つき、音楽ライブ、茶会に加え、プログラムは40へと大幅増、約2000人の方々に参加していただき大好評をいただいた。

■高原一貴(船場アートカフェRA)

4U

CCSワークショップ "Academic Publisher Elsevier's International Strategy with Reference to CCS"
CCS Workshop "Academic Publisher Elsevier's International Strategy with Reference to CCS"

2011年11月21日(月)、エルゼビア社のクリス・プリングル氏を迎えて、大阪市立大学高原記念館において第11回CCSワークショップが開催された。これは、ソウルで開催されたユネスコ創造都市ネットワークの世界大会とリンクする形で、City, Culture and Society (CCS)において、ユネスコ特集号(特集名: The Creative Power of Cities)が組まれたのを記念して行われたものである。ユネスコ特集号では、有力研究者による論考が掲載されるだけでなく、Francesco Bandarin氏 (Assistant Director-General for Culture, UNESCO) が巻頭言を寄稿するなどユネスコとCCSの連携を示すものとなっている。

プリングル氏、佐々木編集長、岡野編集局長は、ソウルの世界大会期間中にユネスコの局長等と今後の関係構築のあり方を議論、CCSの世界戦略は大きな前進を見た。ソウルの大会後、大阪を訪れたプリングル氏は、西澤学長、宮野副学長を表敬訪問し、大学との関係を深めた。

CCSワークショップでは、「学術出版社エルゼビア社の国際戦略: CCSに関連させて」と題する講演を行い、世界トップシェアの学術出版社としての戦略と責務に関して興味深い見解を聴衆に示した。そこでは、リーマンショック後、多くの産業が停

滞する中、「知」への世界的な欲求から、学術出版産業は着実に成長していることが示され、今後はアジア・中南米の市場が重要になるとの見解が示された。その中で、アジアで編集を行っている唯一の都市論に関する国際ジャーナルであるCCSに対して大きな期待感を表明した。



クリス・プリングル氏の講演

■堀口朋亨(都市研究プラザ特任講師)

On November 21, 2011 (Mon.) we welcomed Dr. Chris Pringle of Elsevier, Ltd. and held the 11th CCS Workshop in Osaka City University's Takahara Hall. This was to commemorate putting together the UNESCO Special Edition of City, Culture and Society (CCS), titled "The Creative Power of Cities." In an address, Dr. Pringle pointed out the great potential of CCS and expressed his high expectations.

報告

Report

国際ラウンドテーブル「都市の世紀を拓く」(第2回)セッション5 若手研究者による研究報告

Presentation by Young Researchers at the 2nd International Roundtable Meeting

第2回国際ラウンドテーブル会議「都市の世紀を拓く」の二日目となる12月2日(金)の午前に都市研究プラザに所属する若手研究者による報告が行われた。報告はいずれも、大きな社会変化のもとでの人々のローカルな実践と、そうした実践がより広範なインパクトを持つことを検討したものであった。

まず、馬然(G-COE特別研究員)は、中国において四川大地震後に独立的な立場をとる映像制作者たちによるドキュメンタリー制作とそれらに対する政府介入について映像を交えながら論じた。「人民」共和国における人々の創造的活動の難しさを示した。

第二報告者の北川眞也(G-COE特別研究員)は、移民を送り出す国から受け入れる国へと転じたイタリアに関する研究を報告した。地中海に浮かぶランペドゥーザ島は、北アフリカから移民が多数到着する場であり、受入と追放の間でのローカルな実践にみられる葛藤を論じた。

Program

Session 5 Presentation by young researchers

Chair: Kenkichi Nagao (Osaka City University)

1. Ma Ran (Osaka City University)
From 512 to 1428: independent documentary filmmaking and the power of artistic intervention in Post-Earthquake Sichuan
2. Shinya Kitagawa (Osaka City University)
A "crisis" of Lampedusa in Italy in the face of migrants' movements: thinking on a politics of place between reception and push-back
3. Kazuya Sakurada (Osaka City University)
After the "years of lead" in the 70s: DIY social centers in Italy
4. Tomoko Hayashi (Osaka City University)
Public art centers in regional communities: the case study of the Great East Japan Earthquake

第三報告者の櫻田和也(都市研究プラザ特任講師)は、イタリアの1970年代末から始まる弾圧と暴力の時代に登場し、社会センターとして市民メディア活動の拠点ともなったミラノのレオンカヴァッロに関して報告し、「自主管理の公共空間」の可能性を示唆した。

第四報告者の林朋子(都市研究プラザ特任助教)は、東日本大震災以後の東日本におけるアートセンターの調査を通じて、センターの活動傾向を分類するとともに、地域マネジメントに関係する新しい運営形態の可能性を展望した。

第1回国際ラウンドテーブルに続き、若手研究者による研究報告の場を設けた。国際的かつ学際的な場での発表に向けて、準備には多大な労力を要したことであろう。この経験を活かした今後の国際的飛躍を期待したい。

■長尾謙吉(都市研究プラザ運営委員/経済学研究科教授)

Four young researchers of the Urban Research Plaza presented their field research in Session 5 on Friday December 2, 2011 at the 2nd International Roundtable Meeting. Ma Ran showed documentary films made by independent creators. She examined creators' activities under both political intervention of the state and international collaboration. Shinya Kitagawa presented the approach of political geography on immigration issues in a small island in the Mediterranean Sea. Kazuya Sakurada traced the history of social center in Milan in Italy and discussed the possibility of 'autonomous public space'. Tomoko Hayashi classified the activities of public art centers after the Great East Japan Earthquake and prospected future directions.

3U

ビッグイシュー 韓日フォーラム
Big Issue Korea-Japan Forum in Seoul

2011年12月6日（火）、ソウル市にてビッグイシュー日本・ビッグイシュー코리아、そして都市研究プラザの共同主催で、「第1回ビッグイシュー韓日フォーラム：ホームレスの自立を支援するビッグイシューの挑戦」を開催した。

同フォーラムではホームレスの自立を支援するストリートペーパー・ビッグイシュー活動に関するアクションリサーチの成果報告や、両国のホームレス支援に関する最新の動向に関する報告、そして参加者間の交流が行われた。今回の交流を踏まえ、今後の持続的な研究及び実践交流をさらに深めていくことで参加者一同合意した。

韓国ではビッグイシュー코리아を始め多くの社会的企業が活発な活動を展開しているが、それには2007年成立した「社会的企業育成法」の存在も大きい。またCSRなど企業や社会からの関心や協力も次第に増えてきており、社会的企業を支えるような制度環境、市民社会の成熟が垣間見られた。当日のフォーラムでもソウル市の高い関心がうかがわれ、フォーラム前には、市民運動家出身で今年の補欠選挙でソウル市長に当選した朴元淳氏（弁護士、55歳）への表敬訪問も実現した。

朴市長は日本の市民運動にも関心が高く、数年前には国際交流基金の助成を得て日本に滞在し、日本の市民運動をレポートした著書を刊行したこともある。今回の市長選では公約の中に低所得層の福祉の向上を第一に掲げ、その次に社会的企業の育成支援を掲げていたこともあり、日本からのフォーラム参加者を温かく迎え入れてくれた



ソウル市長と記念撮影（左から3人目が朴市長）

当日のフォーラムは、平日の開催にもかかわらず約100名の参加者で会場が賑わった。今回の会場となったのは、ソウル市江南区の若者たちで賑わう繁華街にあるメガボックスという映画館である。同フォーラムは映画館内の一つの上映館を借り上げて実施された。

特筆すべきことは、今回の会場である映画館も、そして本フォーラムの通訳のために駆けつけてくれた若いボランティアの人たちもすべて、「プロボノ（pro bono）」という「知識や技術をいかしたボランティア」であったことである。このプロボノの中には、フォーラムのために、当日職場に休暇願を出して参加してくれた人もいた。

このような多くの人の関心と協力に基づいて、初めての

「ビッグイシュー 韓日フォーラム」は開催された。同フォーラムでは、最初に韓日両国のホームレス事情に関し、韓国からは「韓国ホームレス支援法制定に関連した動向と展望」というタイトルで鄭源午氏（聖公会大学教授）が、日本からは「日本の脱ホームレスと関連した最新の状況」について水内俊雄（都市研究プラザ副所長）が各々報告した。

その後、各国のビッグイシューに関連した実践報告があった。ビッグイシュー日本代表、佐野章二氏による「ホームレス問題とビッグイシュー日本の挑戦」という報告の後、全泓奎（都市研究プラザ准教授）・寛朋子氏（ビッグイシュー名古屋ネット）が「地方都市名古屋におけるホームレス問題とビッグイシュー名古屋ネットの挑戦」について報告を行った。最後に韓国側からも安ビョンフン氏（ビッグイシュー코리아編集部）が「ビッグイシュー코리아挑戦記」、金ウイゴン氏（大田ホームレス支援センター長）が「ビッグイシュー大田ネットワーク挑戦記」についてそれぞれ報告を行った。最後の質疑応答では、会場からの参加者も加え活発な議論が交わされた。

■全 泓奎(都市研究プラザ准教授)

On December 6, 2011 (Tue.), the First *Big Issue* Korea-Japan Forum: “The *Big Issue* Challenge of Helping the Homeless to be Self Supporting” was held in Seoul, jointly organized by *Big Issue* Japan–*Big Issue* Korea and the Urban Research Plaza.

At this forum, there were reports of the results of action research on activities related to the street paper *Big Issue* that aids self support for the homeless, and the recent developments in aid for the homeless in both countries were explained. Additionally, it was agreed to deepen exchanges of sustained research and practical work in the future.

On the occasion of the forum we were able to make a courtesy visit to Won Soon PARK, the mayor of Seoul Metropolitan Government. Mayor Park has made a public promise to assist social enterprises, and he showed great interest in the activities of *Big Issue*.

西成プラザ 生活困難支援の老舗西成での実践を世界発信

現場プラザ短信5

社会的不利地域の再生に向けた調査

社会的不利地域の一つである同和地区においては、これまで住まいの改善等を通じて住民の生活向上を図ってきた。しかし、高齢化の進む社会的不利地域では若い世代の人口流出と同時に、昨今の経済情勢からか、様々な困難を抱えた人たちの流入が顕著になっている。大阪市内の同和地区も例外ではない。都市研究プラザは、2010年より市内4つの同和地区とともに「4地区まちづくり研究会（事務局長：全泓奎都市研究プラザ准教授）」を立ち上げ、インクルーシブなまちづくりの推進に取り組んでいる。本年度は、9月にその内の2地区で市営住宅に入居している全世帯を対象に生活実態調査を実施し、この調査を踏まえて12月には、さらに一部の地区住民を対象にインタビュー調査を行った。

このたびの調査結果は、当該地区の新たな課題を把握するうえで貴重な資料となると同時に、今後、コミュニティに根づいた開発の推進にとっても有益な指標となるであろう。

釜ヶ崎をはじめとする西成区北部には、社会的に有利でない状況が集積しています。釜ヶ崎の一角に集会・研修のスペースを持つ本プラザは、多くの公的組織、NPOと連携し、地域の諸活動に関わりながら、都市問題の本質を社会に伝える、実践的な研究ネットワークから構成されています。



調査の様子

■松原仁美(G-COE特別研究員)

大淀プラザ ホームレス支援から地域のネットワーク／人材の創造

現場プラザ短信6

大淀寮による矯正施設等の退所者支援

大阪市には3つの更生施設と、11の救護施設がある。これら生活保護施設の役割は、書面上では身体上あるいは精神上に障がいがあり生活が困難で保護が必要な人の施設である。しかし、障がいだから、高齢だからといったことだけの単純な問題ではおさまらない。更生施設である大淀寮には野宿生活者、就労困難者、そして矯正施設等の退所者という実にさまざまな課題をもつ人がつながっている。

このように複雑化する福祉的な課題に対し、一人ひとり支援を行う拠点としての施設の存在は大きい。そもそも、施設での支援といえれば施設内で丸抱えのイメージもあるが、大淀寮のように、地域の社会資源と多岐にわたり連携することで、拠点としての意味合いはより強まる。地域生活を視野に、支援をつなぐ地域福祉のモデルといえる。

地域福祉拠点として展開してきた背景には、矯正施設等の退所者支援の取り組みがある。大淀寮では、矯正施設等の退所者支援ネットワークである「よりそいネットおおさか」に参画し、メンバーであるホームレス支援団体、人権問題に取り組む団体、医療関係者や、グループホーム、地域住民などと連携し、新たな課題に取り組んできた。都市研究プラザもよりそいネットおおさかとともに、調査・研究を行っている。その特徴は、同業者の集まりでなく、多分野・多領域が連携することで、新たな課題に取り組んでいる点にある。

矯正施設等の退所者支援をきっかけに、障がい、高齢、野宿、就労、依存症、人権など、複雑化する福祉課題に地域で解決していく拠点としてのポテンシャルが大淀寮にはある。この先進モデルの取組みを発信していく意義は大きい。

■平川隆啓(G-COE特別研究員)

旧大淀区天七に地立し、近接して更生施設や一時保護所、ホームレス自立支援センターの大阪市の日雇、ホームレス支援施設があります。元銭湯を利用した本プラザは、ホームレス現象のオブザーバトリ（観測所）として後方支援にあたり、同時に広い空間を利用した、アートによる地域ネットワーク創造、人材創出の拠点をめざしています。

阿倍野プラザ 近代長屋を活用した居住福祉支援の試み

現場プラザ短信7

20回目を迎えた阿倍野Religion-Cafe

2009年8月からスタートして、毎月1回のペースで開催している阿倍野Religion-Cafeも、2011年11月で20回目を迎えた。これまで、「宗教と芸術・文化」、「宗教とまちづくり」、「宗教とケア」、東日本震災後は、「宗教者と震災復興・支援」といったテーマで、様々な宗派・宗教者の方に講演を行っていただいた。

Religion-Cafeは、それぞれの宗教者が、実践を通じて読み解いてきた日本社会の有り様を、説得力のある語りで聴衆に伝える場として、また、訪れた人も、臨場感を持って何かしらの「学び」を得る場として、これまで継続してきた。言うなれば、話し手、聞き手が互いに繋がりがあえる場であり、Religion-Cafeの特徴の一つと言える。

会場となっている「阿倍野長屋」の空間は、こうした相互の関係を作り出す上で、少なからず影響を与えている。Religion-Cafeが始まる際に、話し手や聞き手を問わず、「まるで実家に帰って来たようだ」、「祖母の家に遊びに来たよう」といった話をよく耳にする。会議室やホールのような、無機質で均質な空間ではなく、生活感や懐かしさを感じる「長屋」の空間であるからこそ生まれる感覚であり、互いの緊張感やよそよそしさを解き放つ。さらには、話し手と聞き手が、互いの垣根を越えて、心から伝えたいこと、聞きたいことを通わせることのできる場となっている。このように、20回を迎えたReligion-Cafeは、話し手、聞き手の枠を越え、互いに気づきをもたらす「学びの場」へと深化している。

■黒木宏一(都市研究プラザ研究補助スタッフ)

阿倍野区の洋館付き長屋を活用した本プラザは、「生と死の質」に焦点を当てた活動を展開しています。高齢者のサロンや町家・長屋を使った店舗による街おこし、伝統建築の技術を継承する団体などと密接に連携しながら、街歩きや生涯学習などを通して、住民の豊かな暮らしを支える拠点として機能します。